

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 14 日現在

機関番号：34416

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2016

課題番号：25370449

研究課題名(和文) 論証的ポリフォニー理論によるアイロニーの分析

研究課題名(英文) Analysis of ironical utterances from the point of view of the Argumentative Polyphony Theory

研究代表者

大久保 朝憲 (Okubo, Tomonori)

関西大学・文学部・教授

研究者番号：60319605

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,700,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、フランスの言語理論である「論証的ポリフォニー理論」のわくぐみで、アイロニーを中心とする、さまざまな修辭的発話にひそむ意味的メカニズムをあきらかにした。そこには、修辭学で緩叙法や婉曲語法とよばれるもの以外にも、したいしいあいてをわざとけなすような「からかい」の発話、アイロニーの一種としての「ほめごろし」などもふくまれる。また、この研究を通じて、日本ではあまり知られていない上記言語理論を紹介できたことも、意義のあることであった。

研究成果の概要(英文)：In this research project, we have elucidated the semantic mechanism underlying a certain number of rhetorical utterances around irony, from the point of view of the "Argumentative Polyphony Theory", a French linguistic theory. In our research subject are included not only such rhetorical figures as irony, litotes and euphemism, but also "banter" consisting in seemingly disparaging close friends, or "home-gorosi", a kind of irony that can be translated as "praising for killing": by planting sarcastic content in apparently praiseful words. Throughout this project, we have also introduced successfully the above-mentioned theory in Japan where it is not well-known, which was also an important outcome.

研究分野：言語学

キーワード：アイロニー 論証的ポリフォニー理論 意味ブロック理論 緩叙法 婉曲語法 からかい 規範的偏向

1. 研究開始当初の背景

(1) 言語学におけるアイロニー研究の中心は、発話行為理論・語用論など、言語使用についての理論の世界にあり、特にスペルベル&ウィルソンによる「関連性理論」による有効な分析モデルによる研究が普及していた。

(2) 本研究代表者は、フランスの論証的ポリフォニー理論の観点からアイロニー研究をおこなう者であるが、このようなアプローチの研究は、本研究以前にはすくなく、特に日本においては皆無といえる状況であり、本研究によってアイロニー研究に新展開をもたらすことを強く動機づけるものとなった。

2. 研究の目的

本研究は、フランスで 80 年代に提唱され、近年新たな展開をむかえた「論証的ポリフォニー理論」を検証・発展させながら、アイロニーを中心とし、緩叙法 *litotes*、婉曲語法 *euphemism* など「修辭的」と呼ばれる発話のメカニズムを総合的に記述することを目的とする。このような発話の言語学的研究は、認知言語学・語用論の分野でさかんに行われてきたが、本研究は、これらの研究成果を批判的に検証しつつ、日本の言語学研究でほとんど取り上げられることのなかった「ポリフォニー」の概念をもちいて、こうした現象の記述可能性を追究するところみであった。対象言語は、フランス語・日本語・英語とした。

(1) アイロニー研究：アイロニーは古典修辭学以来「批判のレトリック」としてさまざまに議論されてきたが、近代になり、Grice, Searle らの語用論的アプローチによる研究によって新たな局面をむかえた。この流れは、関連性理論の枠組みでさらに発展し、その記念碑的論考ともいえる Sperber & Wilson の “Irony and the use-mention distinction” (1981) 以降、いわゆる「反復的言及 *echoic mention*」による説明をめぐるさまざまな議論がさかんに行われている。本研究では、その理論的成果を大いに参照する一方で、表意/推意といった記述法で発話の意味をとらえる意味論・語用論観に与しない、「論証的ポリフォニー理論」の観点から、アイロニー研究に理論的オルターナティブを提案することを目的とした。

(2) 論証的ポリフォニー理論：この理論は、Ducrot の著作 *Le dire et le dit* (1984: ch.8) において、文学研究におけるバフチンの「ポリフォニー」の概念に着想を得て、当初は「言語学的ポリフォニー理論」として提唱され、以後、フランス・北欧を中心として発展してきたものであるが、2000 年代半ばから Ducrot 本人と Carel らによって理論の大幅な見直しがおこなわれ、Carel の著書 *L'Entrelacement argumentatif. Lexique,*

discours et blocs sémantique (2011) によって「論証的ポリフォニー理論」として再定式化され、新たな展開をみている。この理論の基本的な考えかたは、従来ひとつの発話にはひとりの発話主体が存在するという一見自明の見解を見直し、否定文やアイロニー、ユーモア、自由間接話法、その他さまざまなモダリティ要素を含む発話が、言語レベルで複数の声=発話者を指定することによって的確に記述されることを主張するものである。この理論はまた、本来 Ducrot らの言語内論証理論と理論的に表裏をなすものである。言語内論証理論は、Anscombe & Ducrot の *L'argumentation dans la langue* (1983) に始まり、「トポス理論」などをへて、現在の Carel, Ducrot らを中心とする「意味ブロック理論」に継続的に発展してきた。その一方で、ポリフォニー理論のほうは、Ducrot (1984) 以来、理論的精緻化の面で遅れをとっていたといわざるをえなかった。その意味で Carel (2011) で再体系化された「論証的ポリフォニー理論」の理論的重要性は大きい。論証的ポリフォニー理論では、発話に観察される「複数の主体」を、言語内論証理論の立脚点にしたがって、言語内的な現象としてとらえなおそうという姿勢をつらぬきつつポリフォニーの意味を記述しなおすことが試みられている。

(3) 目的：本研究代表者は、論証的意味ブロック理論に基づいて継続的におこなってきた同語反復文・矛盾文の研究に始まり、緩叙法的発話を漫才におけるボケ・ツッコミにむすびつける試み(大久保 (2010))から次第にポリフォニー的な観点を導入し、アイロニー研究におけるその有効性を模索しつつあった。本研究では、こうした研究のながれをふまえ、アイロニーを中心とするさまざまな発話の、論証的ポリフォニー理論による記述可能性を追究し、関連性理論ベースの論調に対抗しうる研究の切り口を示すことを目的としていた。

(4) 本研究がめざしたもの

ポリフォニー理論は、フランス語圏の言語研究の文脈の外ではあまり知られておらず、日本では、この理論にもとづいた言語学研究は少ない。他方、論証的ポリフォニー理論は、本研究が対象とするアイロニー以外にも、「複数の声」の存在を喚起するさまざまなタイプの発話を、同じ道具立てで分析できる可能性を含むものであると評価できる。以上の観点から、本研究では以下の2つのものを明らかにすることをこころみた。

① 論証的ポリフォニー理論の有効性：Carel (2011) によるポリフォニー理論は、現時点ではさまざまな面で精緻化を必要としており、理論的諸概念についても具体的な事例研究

による検証が必要である。そこで、本研究では、理論内で十分に扱われていないアイロニーとその周辺の発話のポリフォニー的特徴を詳細に分析し、理論の適用可能性を検証するとともに、理論に対して必要な修正を提案することを企図した。

②ポリフォニー理論による言語内現象としてのアイロニー：アイロニー研究で議論されている、反復性・見せかけ性の議論について、本研究の立場を明らかにし、先述の「トーン」と「テキスト機能」を中心概念とした有効な記述をこころみた。また、アイロニーとそれに結びつく批判性・ユーモアとの関係についても、従来の理論以上に説得的に記述できる可能性があると考えられるので、その点についてもとりくもうとした。

3. 研究の方法

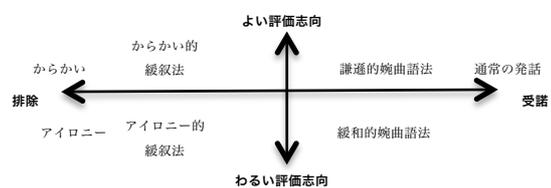
本研究は、論証的ポリフォニー理論の検証と修正、アイロニーを中心とするさまざまな発話のポリフォニー理論による分析、という2つの軸を中心に展開された。前者については、ポリフォニー理論の成立から現在までの展開および言語内論証理論との関係を整理・検証し、日本語論文などによってそれらを紹介し、日本の意味論・語用論研究の現場にその足場を形成することを試みた。後者のアイロニー研究については、データのきめこまかい分析により理論の精緻化をめざし、アイロニー関連のその他の修辭的発話もふくめたアイロニーの統合的な記述が、本研究のアプローチによって可能となることを実証的にあきらかにすることをめざした。これらに必要な文献を網羅的にとりそろえ、多彩なデータ収集を充実させることもこころがけた。

4. 研究成果

本研究をとおして、アイロニーを中心とし、緩叙法、婉曲語法、からかい、といった関連する文彩や語法を、論証的ポリフォニー理論および意味ブロック理論のわくぐみにただしく位置づけることに成功した。詳細についての検討課題はのこっているが、おおむね以下のようにまとめることができた。

(1) 論証的ポリフォニー理論の修正：この理論は、発話の意味内容を、どのようにしてディスコースにのせるかということについての理論である。その主たる道具だてとして、Carel (2011) では「トーン ton」と「発話機能 fonction textuelle」という概念が提案されている。わかりやすくのべると、トーンとは、発話の内容が「だれ」の声によつてのべられているかということにかかわり、発話機能とは、その内容にたいして、話者がどのような態度をとっているかにかかわる。トーンについては、本研究であつかった事例のほとんどが「話者トーン」（話者そのもの声による

発話）であることから、特にこの概念をみなおすことはしなかったが、発話機能については「受諾 prendre en charge」「排除 exclusion」「承認 accord」と規定される概念のそれぞれに一定の段階性をみとめることを提案し、これにともなつて「発話機能」にかえて「発話モード」の語をあたえた。このような修正によつて、アイロニー、緩叙法、婉曲語法、からかいといった文彩を、理論内で体系的にとらえることができるようになる。いっぽうでは、反語による典型的なアイロニーと緩叙法が排除の発話モードの強弱のスケール上にとらえられ、他方では、婉曲語法と通常の（文彩のない）発話が受諾モードの強弱のスケール上に位置づけられる。また、これらのスケール上で、意味的規範性のちがひによつて、アイロニーとからかいは区別され、謙遜とひかえめ発話が区別されることになる。以上を図式化すると以下ようになる。



このようなスケールを想定することで、「発話機能」を、より柔軟な志向性にとらえることで「発話モード」という概念を提案した。

(2) 各種文彩の理論的布置

上記図内にしめした「謙遜的婉曲語法」「緩和的婉曲語法」は、ストレートな表現を婉曲的に回避するという点で、ともにポライトネスにかかわる表現である。前者が、ストレートにのべることで傲慢な印象をあたえるのをさけるための謙遜的文彩であるのに対し、後者はおなじ事由で攻撃的になるのをさけるための緩和的文彩である。従来、このようなポライトネス表現に関して、アイロニーとの「似て非なる」側面がしばしば指摘されてきたが、本研究によつて、それぞれの文彩の理論的布置をかんがえることで、これらの文彩の意味的・発話的關係があきらかになった。アイロニーとは、それが典型的な反語的アイロニーのばあいには、話者が発話された意味内容を受諾せず、排除することで成立する。アイロニー的緩叙法でも、おなじような排除がおこっているが、ここでは排除が完全なものではなく、そこから反語的アイロニーよりも「ゆるい」アイロニーが成立することになる。いっぽう緩和的婉曲語法は、アイロニー手気緩叙法とは対照的に、話者は発話された内容を受諾するが、婉曲な発話をおこなっていることをつたえるために、その受諾は完全なものではない、「よわい」受諾となる。受諾と排除は対概念であるので、アイロニー的緩叙法での不完全な排除と、緩和的婉曲語法の不完全な受諾は、スケール上でちかい存在

となり、そこからアイロニーとポライトネス表現の近接性が生じ、本研究の提案がこれをただしく記述しているとかんがえることができる。このようなとらえかたにより、ポライトネスに動機づけられた婉曲表現がつねに「慇懃無礼」の危険をおかし、通じなかったアイロニーではその攻撃性がなく、さげすまれるといった、日常的な言語経験も正しく理解することができるのではないだろうか。

(3) 規範的偏向をめぐる問題：(2)では、よい評価志向の文彩である「からかい」「謙遜的婉曲語法」についてはふれなかったが、受諾と排除のバランスによって相異が生じる文彩という点では、わるい評価志向のものとおなじである。そのいっぽうで、すくなくとも一般的な発話では、たとえば、わるい評価志向のアイロニーのほうが、よい評価志向のからかいよりも使用頻度がたかいという印象がもたれやすい。これは反語的に「よい」意味のことをいって攻撃的な発話をおこなうことのほうが、反語的に「わるい」意味のことをいって好意的な発話をおこなうことよりも、文彩として成立しやすいというふうにいえることができる。本研究では、このことを説明するために、Wilson (2014) なども指摘されている「規範的偏向 *normative bias*」の関与をかんがえ、これを、本研究の理論的枠組みに位置づけた記述をこころみた。これについては、今後さらに分析を精緻化する必要があるとおもわれる。

以上から、本研究では、アイロニーやポライトネスにかかわるさまざまな文彩を、ただしく記述できることをしめすひとつの理論的モデルを提案したが、このような、従来個別に研究されてきた種々の文彩の体系的理論化は、論証理論、語用論、レトリック研究などの分野に、一定の影響をあたえうるものであるということがわかった。

〈引用文献〉

- ① Carel, Marion (2011) *L'Entrelacement argumentatif. Lexique, discours et blocs sémantiques*, Paris, Éditions Honoré Champion.
- ② Wilson, Deidre (2014) "Irony, hyperbole, jokes and banter" in J. Blochowiak, C. Grisot, S. Durrleman-Tame, C. Laenzlinger (eds.), *Papers dedicated to Jacques Moeschler*, Genève. www.unige.ch/lettres/linguistique/moeschler/Festschrift/Festschrift.php

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 6 件)

① Okubo, Tomonori "Litotes et euphémismes du point de vue de la théorie argumentative de la polyphonie", *Verbum*, XXXVIII, no 1-2 ("Le sujet dans la langue. Théorie des blocs sémantiques et théorie argumentative de la polyphonie" (ed. A.M. Lescano), 2016, 111-129. (査読有)

② 大久保朝憲, 「評価述語の規範的偏向とアイロニー」『関西大学文学論集』66-3, 2016, 313-345. (査読無)

③ Okubo, Tomonori "L'ironie : 'violation' ou 'transgression' des maximes conversationnelles ?", *Voix Plurielles*, 12-1, 2015, 186-196. (査読有)

④ 大久保朝憲, 「『ほめごろし』の言語学」『日本語用論学会 第 17 回 大会発表論文集』10, 2015, 17-24. (査読無)

⑤ 大久保朝憲, 「アイロニー・からかい・緩叙法・婉曲表現についての試論」『関西大学文学論集』64-4, 2015, 81-106. (査読無)

⑥ 大久保朝憲, 「論証的ポリフォニー理論による緩叙法・婉曲語法の分析」『日本語用論学会 第 16 回 大会発表論文集』9, 2014, 17-24. (査読無)

〔学会発表〕(計 12 件)

① Okubo, Tomonori "Normative bias in irony and other types of speech", *Contradiction Studies: Mapping the Field – Inaugural Conference on Concepts of Contradiction in the Humanities*, 2017 年 2 月 9-11 日, ブレーメン大学 (ドイツ)

② Okubo, Tomonori "Pourquoi l'ironie typique est-elle toujours antiphrastique et critique ? – déviation normative dans la négation et dans l'ironie", *Linguistique et écrit, 2 : l'énonciation*, 2016 年 11 月 24-25 日, パリ社会科学高等研究院 (フランス)

③ Okubo, Tomonori "Irony, banter, litotes and euphemism from the argumentative point of view", *The discursive practice of irony and banter*, 2015 年 11 月 12-13 日, リヨン第 3 大学 (フランス)

④ 大久保朝憲 「論証的ポリフォニー理論とアイロニー：ほめごろしのディスコースをめぐって」, 日本フランス語学会研究促進プログラム「パロールの言語学」第 1 回研究会, 2014 年 12 月 6 日, 早稲田大学

⑤ 大久保朝憲 「『ほめごろし』の言語学」,

日本語用論学会第 17 回大会, 2014 年 11 月 30 日, 京都ノートルダム女子大学

⑥ Okubo, Tomonori “Critically exploited figurative utterance: *Home-gorosi* or backhanded compliment in political discourse”, *CADAAD (Critical Approaches to Discourse Analysis Across Disciplines)* 5, 2014 年 9 月 1-3 日, エトヴェシュ・ロラード大学 (ELTE) (ブダペスト (ハンガリー))

⑦ Okubo, Tomonori “Il a un peu bu, celui-là : litote ou euphémisme ?”, *Colloque “Marqueurs d’intensité et positionnement énonciatif*, 2014 年 6 月 27 日, L’université Paris-Est Marne-la-Vallée (パリ東大学 (フランス))

⑧ Okubo, Tomonori “Figures faibles ? : litote et euphémismes dans le discours”, *International Linguistic Association 59th Annual Conference*, 2014 年 5 月 22 日, パリ第 2 大学 (フランス)

⑨ 大久保朝憲 「ポリフォニー理論の新展開：アイロニー・緩叙法・婉曲語法」(招待講演), 2013 年 10 月 29 日, 筑波大学

⑩ 大久保朝憲 「論証的ポリフォニー理論による緩叙法・婉曲語法の分析」日本語用論学会第 16 回大会, 2013 年 12 月 7-8 日, 慶應義塾大学

⑪ Okubo, Tomonori “L’ironie : ‘violation’ ou ‘transgression’ des maximes conversationnelles ?”, *Colloque International : Langues, cultures et apprentissage : La transgression : de l’émancipation à la progression*, 2013 年 9 月 30 日-10 月 1 日, 西カトリック大学 (フランス)

⑫ Okubo, Tomonori “Litote et euphémisme du point de vue de la théorie argumentative de la polyphonie”, *Journée d’étude : “Argumentation et polyphonie – Linguistique, rhétorique, philosophie, sciences de l’éducation –*, 2013 年 6 月 17-18 日, トゥールーズ大学 (フランス)

〔図書〕(計 3 件)

① Okubo, Tomonori “Irony, banter, litotes and euphemism from an argumentative point of view”, In Sorlin, Sandrine & Manuel Jobert (eds), *The pragmatics of Irony and Banter – Proceedings Conference Lyon 2015*, John Benjamin Publishing, 2017 (印刷中につき頁数未定) .

② 大久保朝憲, 「アイロニー・からかい・緩

叙法・婉曲語法」『フランス語学の最前線 4 – 談話、テキスト、会話』(東郷雄二・春木仁孝 編), ひつじ書房, 2016, 303-339.

③ Okubo, Tomonori “Irony in two theoretical frameworks : Relevance theory and Argumentative polyphony theory”, In Arigne, V. & Ch. Rocq-Migette (eds.), *Metalinguistic Discourses*, Cambridge, Cambridge Scholars Publishing, 2015, 183-199.

6. 研究組織

(1) 研究代表者

大久保 朝憲 (OKUBO, Tomonori)

関西大学・文学部・教授

研究者番号 : 60319605